建築デザイン研究室

Architectural Design Lab.

福原 和則

FUKUHARA, Kazunori / Professor

木霊の溜まり　木材流通機能を持つ駅による新たな木造都市のカタチ

Pool of Spirits Dwelling in Wood: New Form of Wooden City with Station as Timber Distribution Function

森林が国土の約７割を占める世界有数の森林国に住む私たち日本人は古くから木と深い関係を築き、木の文化を継承してきた。

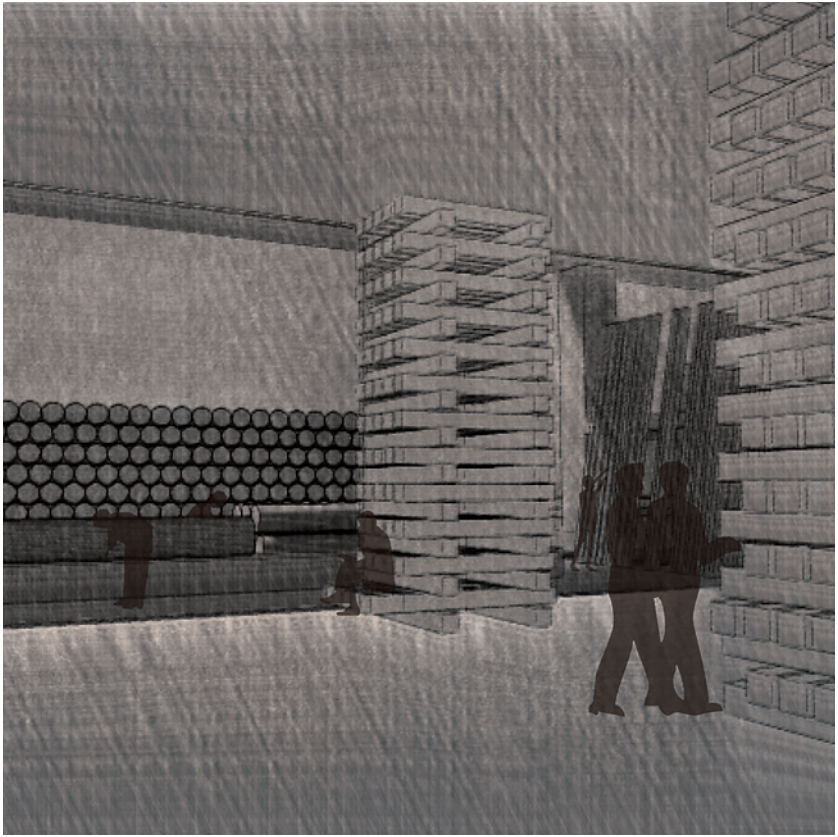
かつては木で形成されていた日本の都市は近代化により、RCや鉄骨に置き換えられた。しかし昨今、再び木材が活用され木の時代が訪れようとしている。木は身近な存在であるが、木の流通プロセスはあまり知られていない。

本提案では鉄道を通して木の集散地である奈良県桜井市の桜井駅を対象とし、鉄道駅を木材流通拠点とした木の文化を発信する新たな木造拠点を提案する。

木の流通プロセスを可視化することで、訪れる人に木材産業を知ってもらい、木に対する関心を促すことで木の文化を継承していく。また、モーダルシフトにより鉄道輸送の増加が見込まれる中、木材の鉄道輸送を積極的に推進する。

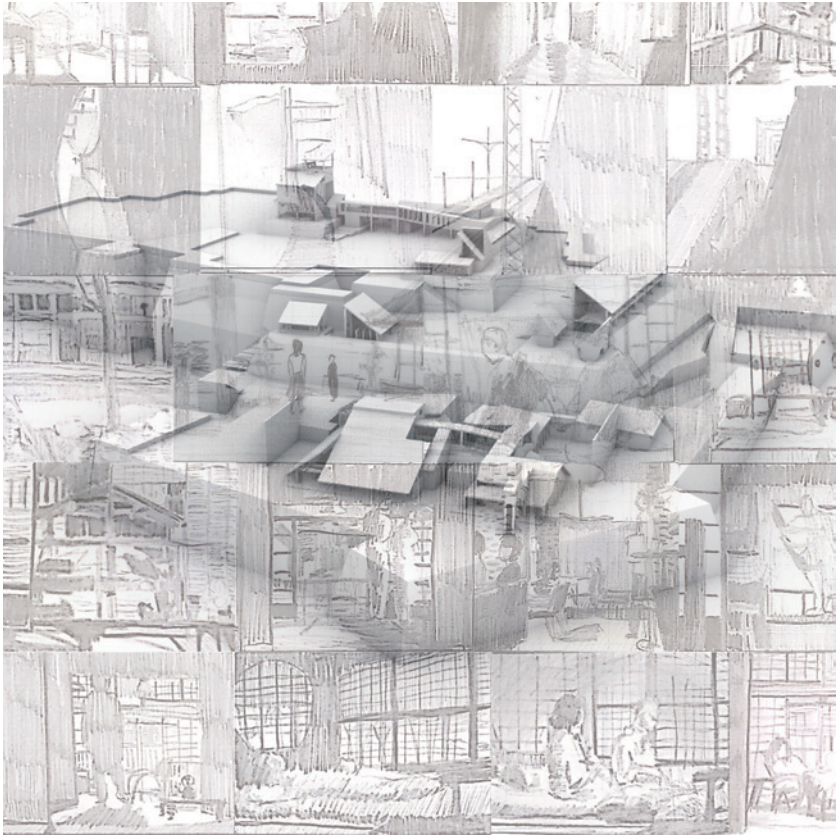
かつて鉄道を通して木のまちとなった桜井は、再び鉄道を通して日本の木の文化を伝える「木造都市」として生まれ変わる。

井宮 靖崇
IMIYA, Yasutaka



一刻の輪廻　――小津安二郎 映像空間ミュージアム――

Moment Cycle: OZU Movie Museum



メタバース。それは実空間にパラレルワールドが作られること。100年の時を経て小津安二郎が再び芽吹き出す。

形状を残すことで城下町の成り立ちを保存する現在の城跡に、その城下町で育った者の軌跡の保存をメタバースで行う作品である。

三重県松阪市松坂城跡。1588年蒲生氏郷が築城して誕生したこの城下町は豪商の町と栄え、1900年代には映画作家小津安二郎を育てた。

小津映画における時間の流れや光景を捕まえること。それは地上から遠く離れたこの城跡で対話した小津の空間は情報としてのおもしろさではなく、無意識に懐かしいと感じるような心の記憶を積み重ねていくだろう。

この土地で育った人たちが幼少期にみた城跡の光景を酒のあてに酌み交わす日が来たとき、小津の軌跡は保存されるかもしれない。

審査会賞
（建築部門3位）

宇野 香 ナバラトゥナ
UNO, Kaori

伝統産業商店街

Shopping Street of Traditional Industry

敷地は大阪府堺市の旧市街地にある商店街。

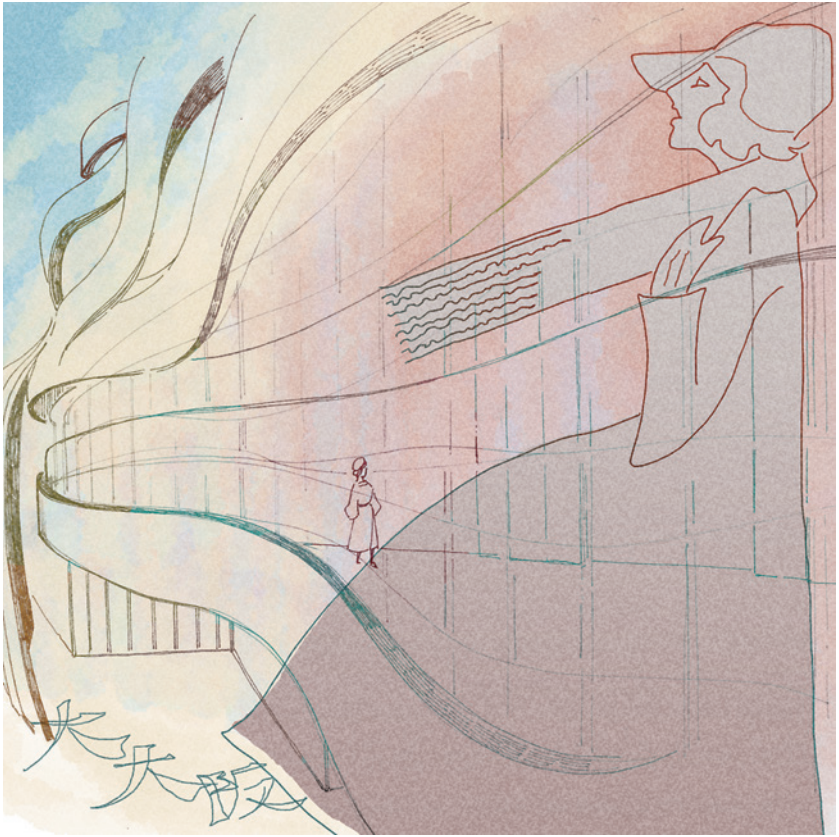
中世に貿易都市・商業都市として栄えた堺は日本第一の文化・先進都市を誇り、「もの始まりなんでも堺」と呼ばれた。現在もその頃の伝統産業が残り、職人のまちとなっている。しかし、近年は高齢化により職人の数が減少し技術の継承が課題となっている。

そこで、現在シャッター商店街となっている商店街に伝統産業の職人養成学校を設計し、商店街の活性化と伝統産業の持続的発展を目指す。

隅埜 健斗
SUMINO, Kento

大大阪狂詩曲　心斎橋モダンガールミュージアム

Great Osaka Rhapsody: Shinsaibashi Museum of MOGA



煙の都の心ブラは　華やぐ大丸　御堂筋
文明開化を身にまとい　帯を放ちて闊歩せむ
えゝぞ　えゝぞ

大正から昭和にかけて大阪がもっとも栄えた時代。その勢いは東京をも凌ぎ、まちにはモダンガール・ボーイと称される先進的な若者が闊歩した。

大阪・心斎橋。江戸時代から「買い物のまち」として親しまれてきたこの地に、ミュージアムとオークションの機能を持った複合施設を提案する。

近年、心斎橋の空きテナント率は伸び続けており、もはや小売業のみでは成長が頭打ちである。かつての栄光を保存、鑑賞、体験するミュージアム機能と、訪れるたびに品物が変わるオークション機能を複合することで、「買い物+ミュージアム」のまちの核とする。

大大阪から100年。ここに新たな心斎橋を提示し、モガが夢見た未来の大阪像を描く。

流行りのまちの生業は　病でさへも吹き飛ばす
いまあらたに風起し　まだ見ぬ心ブラ　令和の足音
えゝぞ　えゝぞ

伊倉泰賞
建築部門賞

拜原 幸恵
HAIBARA, Yukie

不易流行 JCT　高速道路と街の新しい関係を生む「高速ナカ」

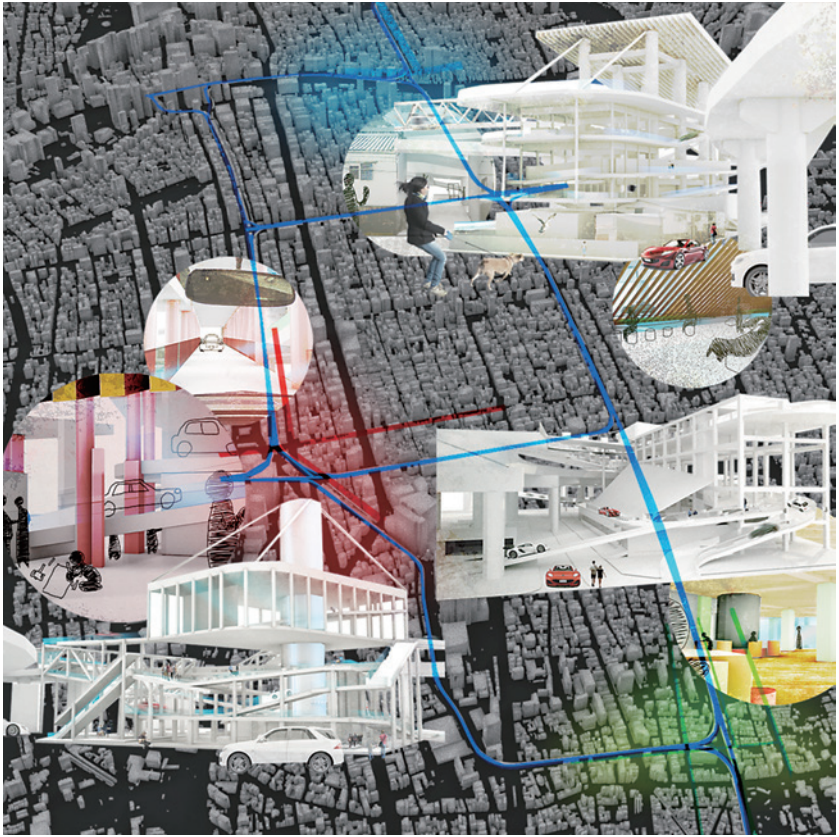
Changeless & Changeble JCT: “KOSOKU NAKA” that Creates New Relationship Between Highways & Cities

コロナ禍と高度情報化社会と呼ばれる時代のなかで、人やモノの移動に関する概念が崩れつつある。テレワークが一般化し、オンラインで簡単に買い物をする習慣が広がった。一方で空間として動く自動車の価値が見直された。

しかし、都市における高速道路は、依然として高速移動の経路に過ぎず、都市との関わりを持てないままである。

そこで、車が、単なる移動手段から移動空間へと、その意味合いの主軸を変える今、街と関りを持つ車と高速道路の新しいかたちを提案する。

阪神高速は、かつて、人とモノを運んだ堀川の上に位置している。堀川の河岸のように街に寄り付く接点を「高速ナカ」として設える。減速車線から入場すると、まちナカのようなサービスを時には車上で受けることができるシステムである。多様な道の組み合わせと高速の良さを利用して、隣接する街の特徴を引き込むことで、そこでしかできない体験を起こす。WAYからPLACEへの転換である。



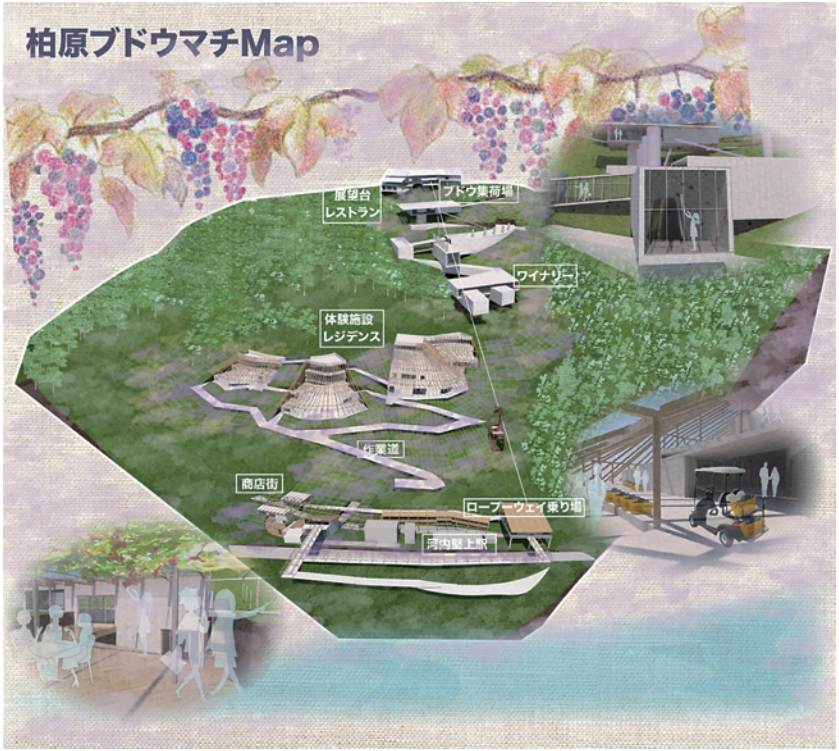
建築部門賞

比嘉 七海

HIGA, Nanami

柏原テロワール　――未来につなぐブドウマチの新しい観光拠点――

Kashiwara Terroir: Base for New Tourism in Vineyard Town



かつては日本一のブドウ生産地であった大阪府柏原市で作られている柏原ワイン。山一面ブドウ棚があった昔の風景と、電車が走り住宅化が進む現在の町の風景が混在する他の生産地では見られない柏原独自のテロワール（土地、気候、人的要素を総合したワインを取り巻く環境）が形成されてきた。しかし現存の観光施設は駅やブドウ畑からも遠い住宅街の中にあり、ワイン造りの現場を体験として感じることはできない。

そこで私は耕作放棄地に未来に繋ぐブドウ作りを基盤としたブドウマチを新たに作り、テロワールに寄り添った体験環境を提案する。駅とブドウ棚が連続して繋がる商店街、山の急斜面にある作業道から入るブドウ農家のためのレジデンスと新たな体験施設、山の頂上から続く斜面を活かしたワイナリー。建築が地形、文化、気候、人々の時間の一部となってブドウマチの象徴となり、訪れる人にとって柏原テロワールでの1日が記憶に残る体験となってほしい。

建築部門賞

松下 歩未
MATSUSHITA, Ayumi

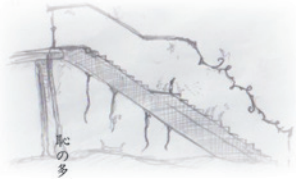
文学が示唆する思考空間　自らが感じる物語

Thinking Space Suggested by Literature: Story You Feel

今、あなたが見ているものは、思っていることは本当に正しいと言えるのか。一般常識や世間体。社会水準で考えることはお上手になれども、自分水準になれば迷い、立ち止まる。いや、世間がそうさせているようにも思う。思考。私を私たらしめる一つの断片。感じた思いの一つ一つは私であり、誰にも邪魔されてはいけない。思いは人生であり、思いは物語である。

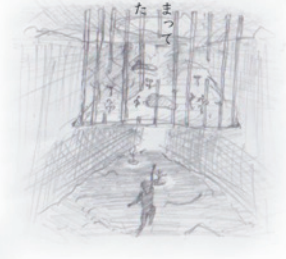
人間失格。主人公の葉蔵は自身、そして世間に対して不信感や恐怖心を抱き続け、堕落しながらも自らの形を問い続けた。作中に散らばる葉蔵の思いの断片は、確かに私たちが持つ弱みや期待を過剰なりとも具現化された姿であるように感じる。

私たちは葉蔵の思いの断片に触れ、私たちはその空間で思いを巡らせる。思考は断片を繋ぎ一つの物語を作り上げる。私だけの人間失格。

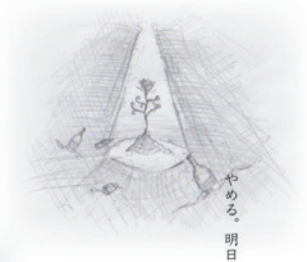


恥の多い生涯を送ってきました

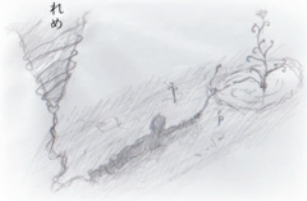
十円しか無いんだからね、そのつもりで



自分は、そこにうずくまって
合掌したい気持ちでした



やめろ。明日から、一滴も飲まない



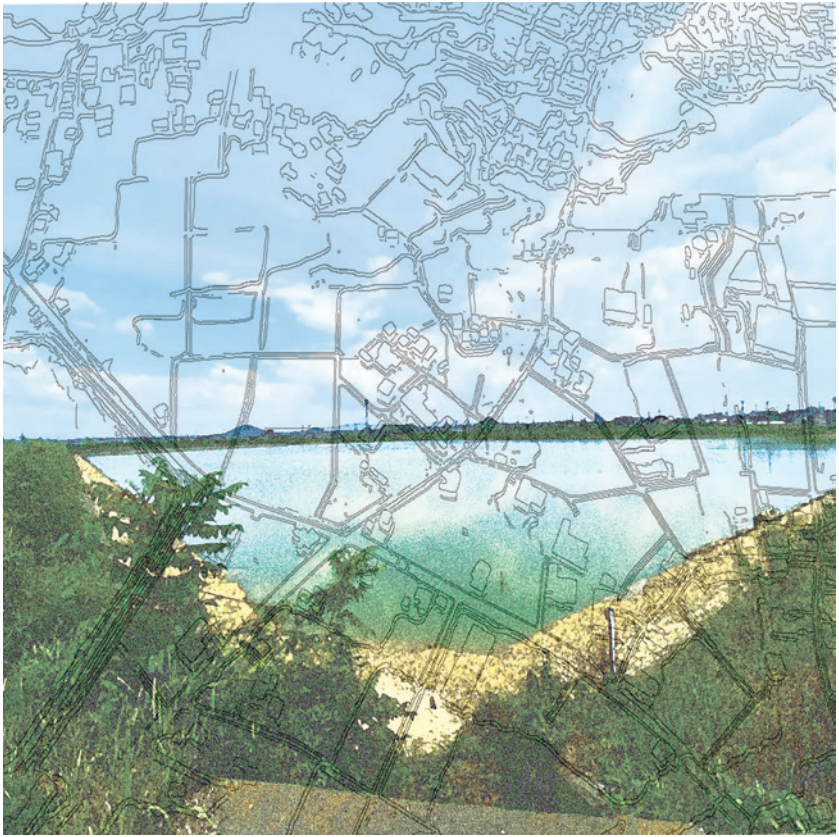
金の切れめが縁の切れめ

上辻 弥成

UETSUJI, Minato

岩岡魂の集い　歴史の継承と疎水がつなぐ幸道

Iwaoka Soul Gathering: Historical Inheritance and Happiness Street



都市化が進む現代において、人の行動範囲は広くなっており、今では国境を越える規模で活躍している。

しかし若者の都市進出により、地域の高齢化や、人口減少が社会問題として取り上げられてている。私の地元「岩岡」も若者が出ていく傾向にある地域の一つだ。そんな地元を見て「岩岡」ならここという場所や空間がないことに気がついた。地元を出てしまった後、帰る目的が少ないことが問題の原因の一つであると考える。

そこで「岩岡」にシンボルとなるような空間、地元を出た人が帰る目的となるような空間を提案する。岩岡は長い疏水の歴史を持つ地域であり、台地に位置する地域であることから貯水手段としてため池が多くあることが特徴的である。岩岡の主要となるため池とため池をつなぐ「道」を敷地とすることで、他のため池の道にも派生していくような将来性のある空間となり、疎水がつなぐ地域の人のため池（溜まり場）が生まれる。

北山 遥也
KITAYAMA, Haruya

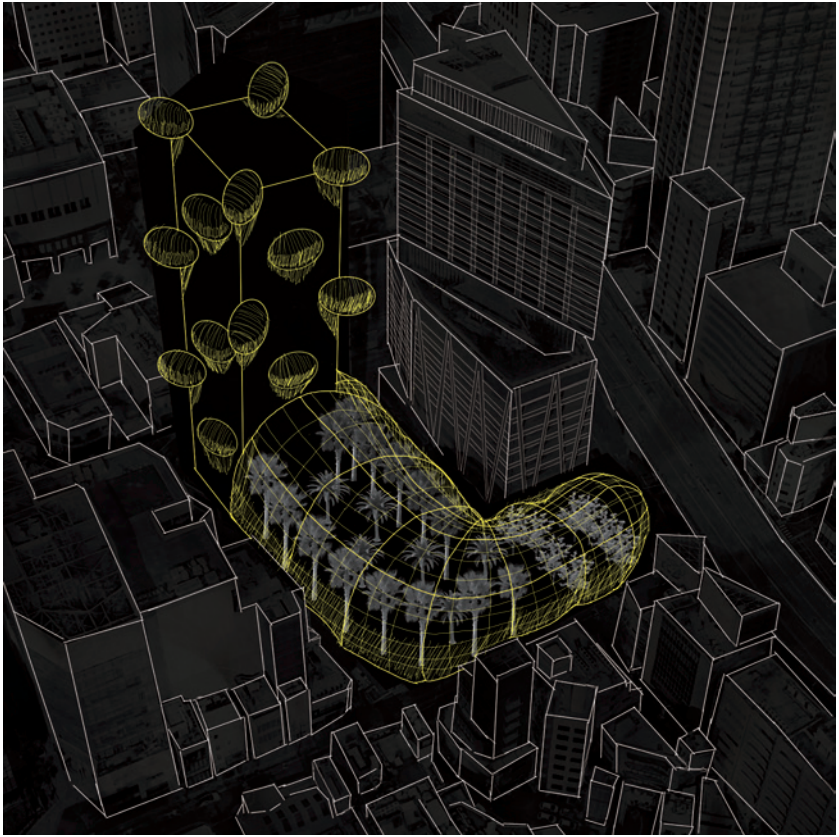
Enjoy　アーバンリゾートホテル

Enjoy: Urban Resort Hotel

SDG'sにおいて地球温暖化はその中心課題である。都市部では徐々に緑化が増え、人々に憩いの場を提供する試みが拡がりつつある。そこで私は梅田の都心部に植物園を併設するアーバンリゾートホテルを提案する。

このホテルは、近畿圏内のレジャー目的の若者や、JRや阪急の利用者を対象に、都市の中でリゾート空間を提供する。人工的な超高層建築がそびえ立つ梅田のビル群のなかに、有機的な形状を持つ植物園が、まるで都市の中心を侵食している。既存の道を残し建物の中を素通りできるようにし、茶屋町を行き交う人々を緑化されたリラックス空間に、知らず知らずのうちに引き込む仕組みだ。

全体のデザインは、蚕と繭をイメージとして作られており、宿泊施設ではまるで繭に包まれて寝ているような感覚を与えている。その繭を作り出した蚕の幼虫はホテルの下で佇んでいるというかたちである。蚕をモチーフにした理由は、この国の繊維産業に貢献した虫であるからだ。

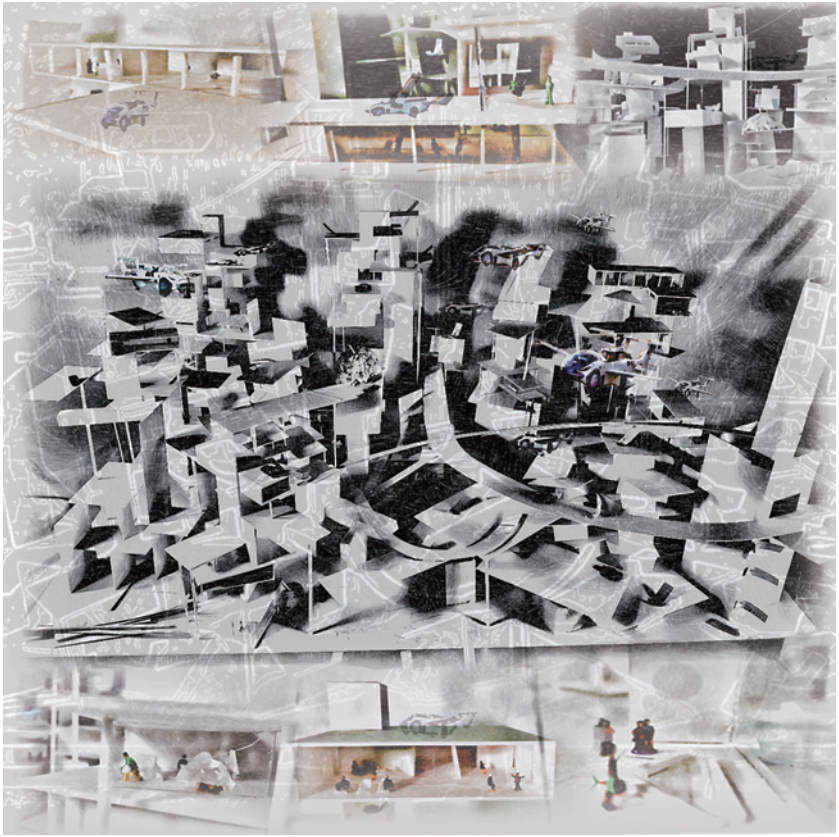


中本 晴久

NAKAMOTO, Haruhisa

蒼(そら)にあこがれて　海に聳える近未来型スカイリゾート施設の設計

Longing for Sky: Futuristic Sky Resort Towering over Sea



地上から空へ。

近年、地方の観光地が衰退している。共通の問題として上げられるのは「リゾート地としてのマンネリ」「交通のアクセスの悪さ」である。

そこで近年注目されている「空飛ぶ車」のスカイリゾート施設を提案し、地域活性化を促す。AI技術の発展・スマートフォンの普及によって2020年代の実用化が予想される次世代の交通手段として注目を集めている。またこれを踏まえ2025年の大阪・関西万博基本計画では「空飛ぶ車の実用化」が予定されている。

この大阪万博に向けてリゾート地活性化計画の一つの拠点として大きな経済効果を期待できる白浜町海上に新しい形の「スカイリゾート施設」を提案する。スカイリゾートは空飛ぶ車でしか訪れることができない場。車で移動するグランピングビル・空を回遊し各々の場所で山海の景色を一望できる複合リゾート施設の提案。

近未来型スカイリゾート。令和に新しい風を吹かせる。

前田 大輔
MAEDA, Daisuke